

県外派遣報告書

報告者 隈元 ゆみこ (高体連)

大会名：第1回全日本社会人バスケットボール地域リーグチャンピオンシップ大会

派遣期間：2月8日(金)～2月11日(月・祝)

場所：群馬県高崎市 高崎アリーナ

1. 研修会内容

<講義> 2月8日(金) 16:00～17:30

講師：久保 裕紀 氏

テーマ1：3vs2

3ptsのアテンプトに対して(いくつかの映像クリップを見ながら)

ピーク・フラッシュ はっきり示す。

見たもの(見えたもの)は情報としてはっきり示す習慣を。

→当たり前のことを当たり前に。その積み重ねがクルーワークにつながる。

→パートナーが必ず確認できているとは限らないということを前提として。

情報をもっていないなら、無理に示す必要はない。

特に、速攻時のクイックショットでTが確認できないものに関してはアシストを。

勘違いも起こりうる。

<Bリーグでスタッツをしていて> 研修生：沖縄県 仲間氏

スタッツを担当していて、3点なのか、2点なのかとても重要。本部とチャットで連絡を取っているが、確認できない場合はすぐ本部から連絡がくる。

3人が3ptsと挙がっていると安心する。

<Bjの場合> 研修生：茨城県 大野氏

1点の重み。

ラインを踏んでいたら2点、踏んでいないから3点。具体性が必要。

ミスがあった場合、報酬の10%ペナルティーとなっていた。

EOQ・EOG…必ずショットで終わる。

コンタクトを見がちになるため、足元を見落としてしまうケースが結構ある。

ポンプフェイクからのショットや、スクリーンが絡んだ後の3vs2などで勘違いや間違いが起きやすい。

テーマ2：スクリーン

スクリーンには表と裏がある。

チェックイン…スクリーンの受け手

チェックアウト…スクリーンを送り出す側

どちらのRefが見るべきなのか(プライマリの理解)どこがActiveなのか。

オフボールスクリーン、オンボールスクリーン

どちらも Active なのであれば、まず T はボール。
スクリーンは 1 度とは限らない。リスクリーン、リピック
オンボールスクリーンからの sudden shoot→FUL (Foot, Up, Landing)
ストロングサイドのポケット (3 PO の一番弱いスポット) の理解→ストロングサイドのハイポスト

- ◎見た (判定した) 情報は、はっきりと示しましょう。
- ◎パートナーは必ずしも自分が持っている情報を共有しているとは限らないということを知っておきましょう。
- ◎プライマリ、セカンダリやプレイの表・裏 (アングル) を理解することで正しい判定につながる。
→自分が見えないアングルは、パートナーが持っている。

同じプレイを判定していても、中身が違うことも考えられます。
コミュニケーションをとるときは、必ず言葉に出して共有しましょう。

<コミュニケーションの 2 つのパターン>

- アシスト：持っている情報を伝え、その場で共有。
- セカンド・オピニオン：パートナーから情報が欲しいとき、意見を聞きたいときは自分からコミュニケーションをとりましょう。

※「見たもの」「判断したもの」を「正直に」「嘘や言い訳をしない」
場面によっては、コーチや選手の意見が参考になるときもある。

⇒「当たり前のことをしっかりと当たり前やる」ということにつながる。

<実技研修> モデル：上武大学男子バスケットボール部 18:00~19:00
事前に班分け (第 14 グループ：武井氏 (栃木)、栗山氏 (和歌山)、隈元) 16 グループあり
講義内容に合わせた実技

① 3 vs 2

- リバウンドから速攻でのショット、その折り返し (1 往復) ピーク・フラッシュ
- ・誰に示したいのかで挙げる手が左右どちらがいいのか決まってくる。細かいことにこだわって!
- ・C to C の入り方、L の入り方。

② H.C 4 on 4 スクリーンからのショット (ピック&ロール)

- ・チェックイン、チェックアウト
- ・ファウルや 3 vs 2 の確認 (ピーク、フラッシュ)

③ H.C 4 on 4 スクリーンからのショット (リスクリーン、リピック)

④ H.C 4 on 4 スクリーンからの sudden shoot

2. 担当ゲーム

① 2 月 9 日 (土) 女子予選：丸紅 対 今治オレンジブロッサム

CC:隈元、U1:鈴木 誠 氏 (長野 A 級)、U2:山田 俊 氏 (宮城 A 級)

<PGC>

まずは、昨日の講義・実技であった、3 vs 2 のピーク、フラッシュ、スクリーンに対しての視野の分担、クルーとしての協力について確認した。また、ローテーションを積極的に行うこと、クロック管理、C での

ポジションアジャストとLによるCの押し上げなど、基本的なことについて確認した。チームの特徴については、お互いがあまり詳しい情報を持っていないという点もあり、フラットな状態でゲームに入る中で、それぞれのプライマリでの判定をしっかりとしていこうと確認した。

<ゲームの実際>

最後まで勝敗のわからないクロスゲームであった。今治はインサイド、アウトサイドとバランスも良く、丸紅はポストプレイというよりドライブからのプレイが多く、お互いシュートが入らない時間帯でのリバウンド、ルーズボールの判定、今治#18の絡みでの判定がポイントであった。

手の使い方というよりも、身体の当て方、寄せ方、オフボールからのカッティングなどについて、ゲーム中にクルーでコミュニケーションをとってはいたものの、ここでの判定が重要であった。

<ゲーム後 MTG> 主任：村田 尚美氏（大阪S級）

アピールされた当事者ではなく、ベンチに近いRefがコーチに対応したり、プレイヤーに伝えたりといった場面が多々みられ、良いクルーワークだと感じた。また、ストロングCという部分において、Cからの判定が多くみられた部分も良い点であった。

その中で、身体の使い方に関してもう少し判定すべきプレイがあった。プレイを長くみているときにはしっかりと判定できているが、後半になるにつれ、どうしてもボールに視野がいきつてしまい、プレイの始まりから終わりを捉えられない状況があった。Cでのオフボールの捉え方、視野の当て方（ボールはTに任せ）をしっかりとしていけば、良い判定につながる。

②2月10日（日） 女子予選：日立笠戸 対 秋田銀行

CC:隈元、U1：坂 美佑紀 氏（茨城A級）、U2：齋藤 慶子 氏（群馬B級）

<PGC>

昨日のそれぞれの試合結果、地域リーグの結果から、接戦が予想されるゲームであること、それぞれのチームのキーとなるプレイヤー、チームプレイの特徴などについてお互いがもっている情報を共有した。また、昨日のゲームにおける個々の課題について、トライできるものについてはトライしていこうということ、クルーワークとしてOOBの協力やクロック管理、FTシューター、ファウル数の確認、メカとして積極的なローテーションについて確認した。判定については、まずは、自分のプライマリの中でそれぞれが今もっているものをしっかりと表現していこうという話をしてゲームに入った。

<ゲームの実際>

途中は日立が10点ほどリードする場面があったが、秋銀が追いつき、予想通りゲームは最後までわからない展開となった。その中で、後方からのリバウンドについての整理、ランニングからのスクリーンにおけるバンプなど、前半の中でしっかりと整理すべきプレイがいくつかあった。また、Cから判定した方がいいケースがいくつかあり、やはり3POにおいてCの積極性ということの重要性をあらためて感じた。TOトラブル（ショットクロックミスやタイムアウトの回数、リング上のタイマーが止まるなど）などもあったが、これはゲーム序盤から出ていたことでもあったので、そういうことも把握した上でゲームを進めていく必要があった。

<ゲーム後の MTG> 主任：早川 貴章氏（新潟A級）

参考までに、ファウルの数について、CC:25個、U1:13個、U2:5個。CCとして、クルーをどうリードしていくか、また、個々の力をどう引き出すか。ブレイク予防の為に、吹いた後にアイコンタクトやコミュニケーションが必要な場面があった。クルーをどうリードしていくか、リーダーシップをどう発揮するかという点において、一人でなんとかしようということではなく、クルーでどのようにやっていくかということは今後やっていく必要がある。

3. 全体を通しての感想

これまで経験したことのあるクラブやブロック国体（成年女子）のゲームとは違い、実業団同士のゲームを初めて経験し、自分自身のCCとしての力量のなさ、クルーをリードする余裕のなさ、また、判定に関しても見極めの部分だったり、視野の分担、クルーワーク、CCメンタリティー、ストロングCの重要性など多くの気づきと学びがありました。初めての 카테고리ではありましたが、これまでやってきたことがしっかりと表現できた部分もあり、その点では、地元やブロックでの取り組みがいかに大切かということ、そして、日頃からもっと細かい部分において強いこだわりを持って取り組んでいくことの必要性を痛感しました。また、レベルの高いゲームにおいて、オフボールでの目の当て方や身体の使い方に対する判定に関して、目を当てるタイミングも含めてもっと勉強していく必要があると感じました。日頃からそういったレベルのゲームを経験できる環境がない分、どのようにして身につけていくかということは自分なりに工夫が必要です。レベル、カテゴリ等関係なく、目の前の一つ一つのゲームに対して真摯に、そしてこだわりを持って取り組んでいくことが、「どんな状況においても当たり前なことが当たり前ができるようになる」ことにつながり、それが良いクルーワークにつながるのだと今回の経験を通して学びました。

鹿児島インターハイ、鹿児島国体へ向けて、一緒に頑張っている地元メンバーと共に、お互いにレベルアップできるよう、今回の学びを地元に戻元できるよう努めてまいります。

最後に、大変お世話になりました群馬県バスケットボール協会の皆様、JSB久保委員長をはじめとする委員の方々、今回の派遣に際し、色々のご配慮いただきました原田審判委員長をはじめ鹿児島県審判委員会の皆様に感謝し、報告いたします。ありがとうございました。